

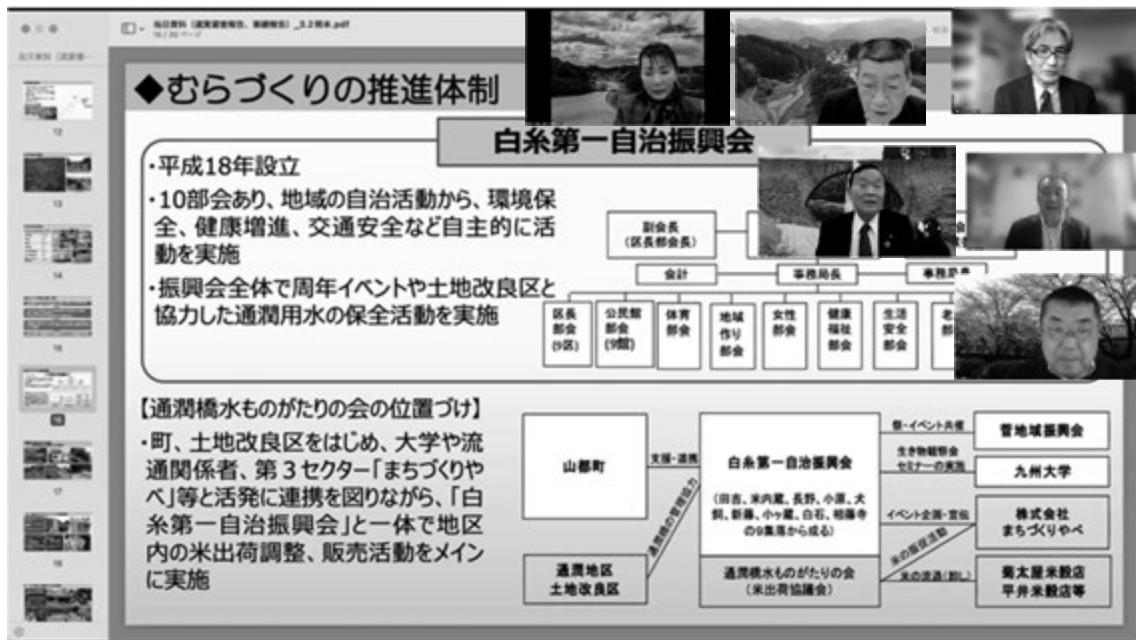
令和3年度（第60回）農林水産祭

第29回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

【「棚田」も「心」も潤して～167年守り続けた 通潤魂、未来へ～】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時 令和4年3月2日（水）13時30分～16時00分
方 法 Web配信によるオンラインでの開催
主 催 農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



令和4年5月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和4年3月2日（水）『「棚田」も「心」も潤して～167年守り続けた通潤魂、未来へ～』をテーマに、平成3年度農林水産祭むらづくり部門の天皇杯受賞者である熊本県山都町の「白糸第一自治振興会」の業績を取り上げて、60名を超える皆様の参加の下、開催しました。

今回は、農林水産祭シンポジウムとしては、Web配信によるオンラインでの開催となりましたが、全国各地から参加頂くことができました。

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和4年5月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和3年度（第60回）農林水産祭
(第29回)「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目 次

シンポジウムスケジュール	2
シンポジウム出席者	3
受賞者の業績概要	4
シンポジウムの記録	6

令和3年度（第60回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【「棚田」も「心」も潤して～167年守り続けた通潤魂、未来へ～】

《スケジュール》

13:30～16:00

(敬称略)

1 開 会 (13:30)

公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事

小栗 邦夫

2 挨 捶

農林水産省九州農政局長

宮崎 敏行

熊本県農林水産部農村振興局長

渡邊 昌明

山都町長

梅田 穂

3 選賞審査報告

農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査
(茨城大学農学部教授)

福与 徳文

4 業績発表

令和3年度むらづくり部門天皇杯受賞

白糸第一自治振興会 顧問

草野 昭治

"

女性部顧問

下田 美鈴

・・・休憩 (14:30～14:40) ・・・

5 ディスカッション (14:40)

(登壇者)

・コーディネーター

福与 徳文 (3に同じ)

・業績発表者

草野 昭治 (4に同じ)

下田 美鈴 ("")

・コメントーター

畠山 智之 (農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員
(NHK放送研修センター日本語センター エグゼクティブアナウンサー))

梅田 穂 (2に同じ)

山下 裕作 (熊本大学文学部教授)

(内容)

・意見交換、質疑応答

・総括

6 閉 会 (16:00)

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（第29回）出席者

R4.3.2（敬称略）

区分	氏名	所属・職名等
業績発表者	草野 昭治	令和3年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 白糸第一自治振興会 顧問
	下田 美鈴	令和3年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞 白糸第一自治振興会 女性部顧問
コーディネーター 及び選賞審査報告	福与 徳文	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 (茨城大学農学部教授)
コメンテーター	畠山 智之	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 (NHK放送研修センター 日本語センター エグゼクティブアナウンサー)
コメンテーター	山下 裕作	熊本大学文学部教授
コメンテーター	梅田 穂	山都町長
挨拶	宮崎 敏行	農林水産省九州農政局長
	渡邊 昌明	熊本県農林水産部農村振興局長
	梅田 穂	山都町長
司会・進行	小栗 邦夫	(公財)日本農林漁業振興会 常務理事

むらづくり部門**出品財 むらづくり活動****白糸第一自治振興会****熊本県上益城郡山都町****1 地域の概要**

山都町は、九州のほぼ中央に位置し、九州のへその町として知られている。白糸台地は、水利の便が悪く、農業生産性の低い土地だったため、江戸時代まで大変苦しい暮らしを強いられていたが、矢部の惣庄屋（現在でいう市町村長）である

布田保之助氏が通潤橋・通潤用水の建設に取り組み1854年に完成。現在も約118haの棚田に水が供給されている。これらの施設の維持管理は完成から167年経つ今日まで住民の手で行われている。

2 むらづくり組織の概要

平成18年に関係9集落からなる「白糸第一自治振興会」を設立し、米出荷協議会の「通潤橋水ものがたりの会」と一体となって活動を行っている。

3 むらづくりの取組概要**(1) 農業生産面**

①棚田管理と収益向上を目的とした米の高付加価値化（特別栽培米）に平成25年度から取り組み、厳格な統一出荷基準を設け、講習会による栽培技術の向上と品質の均一化を図っている。

②「通潤橋水ものがたりの会」を設立してブランディングを進め、厳しい栽培基準を設けているが、特別米を扱う関西の卸販売業者や百貨店での評価を得るまでに至っている。また、ふるさと納税の返礼品としても取り扱われるなど棚田米のブランド化と販路開拓の取組は地域生産者の収益増加につながり、地域農業の振興に著しく寄与している。

(2) 生活・環境整備面

①文化庁の重要文化的景観に選定された後は、地域住民間の意識の共有化が更に強固となっている。食や地域づくりに関する知見向上のための勉強会や地域ビジョン作成のワークショップを重ね、通潤用水に感謝し美しい白糸台地の景観を守りたいという共通認識が住民の意識と地域力を高めている。特に女性部は講演会や議会傍聴等により勉強を重ねており、環境配慮の取組として廃油を使った石鹼作りが女性部ならではの恒例活動となっている。

②全国棚田サミットを地元開催し、地域住民がパネリストとして参加。現地視察も受け入れ、棚田や用水路の案内、田舎料理や弁当のもてなしなどにより棚田サミット開催を成功に導いた。これを機に都市と農村の交流活動も加速して、毎年地域内外から100名以上が参加する「棚田ウォーキングと収穫感謝祭」を企画運営し、青年部がガイド役となり通潤用水の成り立ちと構造、鳥獣被害と電気柵などの対策などについて説明を行っている。

③熊本地震と豪雨災害で大きな挫折感を味わうも、CSR（企業の社会的責任）活動との連携にいち早く取り組み、多くの都市住民とボランティア活動を通して交流活動を継続している。

4 他地域への普及性と今後の発展方向

本取組は、通潤用水と棚田を核としたむらづくりに成功している事例であり、今後の取組の発展が期待できる。

かんがい施設を通して水と環境に配慮した本取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

ただいまから「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭の事務局を務めております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。本日は、コロナ禍が引き続き懸念される中、オンラインでの開催となりましたが、皆様には年度末のご多忙中にもかかわらず参加いただき、まことにありがとうございます。オンラインでの開催はまだ不慣れで、不行き届きな点もあろうかと思いますが、ご容赦いただければと思います。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様方に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助となればと例年開催しているものでございます。また、過去の受賞者の集まりであります協議会が従来実施されてこれまでトッピリーダー発表会の趣旨もあわせて実施をいたします。

農林水産祭は昭和37年に始まり、今年で60回を迎える伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は、現在、7部門に分かれており、過去1年間に各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞された例年500近い出品財の中から、厳正な審査を経て、天皇杯、内閣総理大臣賞、振興会会長賞のいわゆる3賞が授与されます。特に、天皇杯につきましては、わが国で全部で30の天皇杯が授与されておりますが、農林水産祭以外は全てスポーツ関係の表彰であります。有名なのはサッカーの天皇杯や、国体などがございます。この30の天皇杯のうち、農林水産分野で7ついただいていることは、農林水産業がまさに国の礎であり、ご皇室の厚い思いの賜物として大変ありがたく思っているところでございます。

今年度も、昨年11月の勤労感謝の日、新嘗祭の日でもございますが、東京の明治神宮会館で表彰式典を開催いたしました。本日は、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました熊本県の白糸第一自治振興会から下田美鈴様、草野昭治様にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また学識経験者の方々と意見交換をお願いしたものでございます。天皇杯受賞後は何かとお忙しくなられたかと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めてお祝いと御礼を申し上げるところでございます。

本日は主催者の農林水産省からは九州農政局長の宮崎局長に参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】農林水産省九州農政局長 宮崎 敏行

ご紹介いただきました九州農政局長の宮崎でございます。よろしくお願ひいたします。

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶させていただきます。

本日は年度末のお忙しい中、シンポジウムにたくさんの方々がご参加いただきましてまことにありがとうございます。また、皆様方におかれましては、農業農村に関する各種施策に対して、ご理解、ご協力をいただいておりますことを重ねて感謝申し上げます。

初めに、令和3年度農林水産祭むらづくり部門において天皇杯を受賞されました白糸第一自治振興会の皆様、まことにおめでとうございます。白糸第一自治振興会は通潤用水と棚田を核としたむらづくりを進めるため、地域住民が一体となって食や地域づくりに関する知見向上のための勉強会等を重ね、米の高付加価値化や販路の開拓、全国棚田サミットの地元開催を契機とした農村の交流、かんがい施設を通じた水と環境に配慮した自発的な活動など、さまざまなことに取り組んでいただいておりますが、これが高く評価され受賞されたと聞いております。また、熊本地震や豪雨災害で地域が大きな被害を受ける中、復興に向けてC S R活動など、企業連携にいち早く取り組まれ、多くの都市住民とボランティア活動を通じた交流活動を継続されております。本日は、白糸第一自治振興会の顧問である草野昭治様、元女性部長で顧問の下田美鈴様のおふたりから貴重な取り組みのご発表をいただくと聞いています。その後、そういったことを題材にパネルディスカッションが行なわれる予定になっております。

九州農政局管内でも、人口減少や高齢化が進む中山間地域の活性化についてどのように進めていくべきかといった課題を抱えている地域も多い状況にあります。本日のシンポジウムは残念ながらリモートでの開催になってしましましたが、ご参加の皆様方の今後の取り組みを進める上で一助となることをご祈念申し上げます。

最後に、本日のシンポジウムの開催に当たり、熊本県及び山都町を初め、ご協力いただきました関係機関、団体の皆様に感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

○司会 ありがとうございました。

続きまして、シンポジウムの開催に当たりましては、地元熊本県及び山都町の関係者の方々に大変お世話になっております。この場をかりまして厚く御礼を申し上げます。本日

は、熊本県からは農林水産部の渡邊農村振興局長からメッセージをいただいております。

ご紹介いたします。

【挨拶】熊本県農林水産部農村振興局長 渡邊 昌明

皆さん、こんにちは。熊本県農林水産部農村振興局長の渡邊でございます。令和3年度農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶申し上げます。

本日は新型コロナウィルス感染拡大のため、リモート形式の開催となり、ご参加の皆様と直接お会いして親交を深めることができず、とても残念に思います。このような状況の中、シンポジウムの開催に向けご尽力を賜りました農林水産省をはじめ、日本農林漁業振興会など、関係された皆様に厚くお礼申し上げます。

本日のシンポジウムは今年度農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞された本県の白糸第一自治振興会様の業績をご覧いただき、全国各地に普及させていくことを大きな目的として開催されるものと伺っております。白糸第一自治振興会様は地域の宝である白糸大地の農地と通潤橋や通潤用水を熊本地震やその後の豪雨による被害を受けつつも、160年以上の長きにわたり、地域住民の方々や都市住民の方々と一緒にとなって今まで保全されておられます。また、特別栽培のブランド化による農業振興とともに、都市との継続的な交流活動など、地域の活性化のための取り組みを幾つも実践されています。この地域が長く活動を継承できているポイントは、地域の皆さん自らが自分たちが住んでいる地域を愛し、主体的に考え、そして仲間を広げながら行動されていることにあると考えます。本日のシンポジウムを契機に農業・農村の維持発展に向けた多様な取り組みが全国各地で展開されることを大いに期待しております。

結びに、本日ご参加の皆様のより一層のご活躍とご健勝をご祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願ひいたします。

○司会 続きまして、地元の山都町からは梅田町長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】山都町長 梅田 穂

皆さん、こんにちは。山都町長の梅田でございます。今日は令和3年度第60回農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催していただきましたことに心から御礼を申し上げ、一言ご挨拶を申し上げます。

このような機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。本来であれば、会場で皆様に直接ご挨拶申し上げるところでございますが、新型コロナウィルス感染症の感染拡大の影響によりまして、オンラインの参加でございますが、よろしくお願い致します。

このたびは全国各地の数多くの優良事例の中から白糸第一自治振興会が栄えある天皇杯を受賞できました。今回、このようなシンポジウムが開催されますこと、町としましても大変うれしく思っているところでございます。白糸地区は町内の集落の中でも一段と高い台地状の地形になっていますが、日本最大級の石造りの水道橋の通潤橋と通潤用水、そして棚田を生かした地域づくりに取り組んでおられます。今回受賞された取り組みがよい刺激となって町内の各地域に広がることを期待しているところでございます。

本町は昨年5月に内閣府より自治体によるSDGsの活性に向けた優れた取り組みを行なったとして2021SDGs未来都市に選定され、あわせて先導的な取り組みとして自治体SDGsモデル事業に選定されました。有機農業を核とした有機的なつながりが広がる町の実現をテーマに二酸化炭素の排出を抑制し、より付加価値のある農産物の生産や、農村景観を維持し、持続可能な町の実現を目指します。持続的な農村景観の維持はSDGsの理念にも合致しており、本町の目指す姿が白糸第一自治振興会にあると考えております。今後も農業を核とした地域づくりの先駆者として山都町全体を引っ張っていただきたいと考えております。

最後になりますが、本日のシンポジウム開催及び今回の受賞に至り、日本農林漁業振興会を初め、農林水産省、九州農政局、熊本県など、多くの関係者の皆さんにご支援、ご協力を賜りましたことに対しまして、この場をお借りしまして深く感謝申し上げます。今後も本町の発展のためご協力をいただきますようお願いを申し上げまして挨拶とさせていただきます。

○司会 ありがとうございました。梅田町長には後ほどパネルディスカッションにもパネラーとして参加いただくことになっております。

それでは、これから議事に入ります。最初は選賞審査報告でございます。審査委員会の

むらづくり分科会の主査であられます茨城大学農学部教授の福与先生からお願ひいたしました。

【選賞審査報告】農林水産省中央審査委員会むらづくり分科会主査 福与 德文
(茨城大学農学部教授)

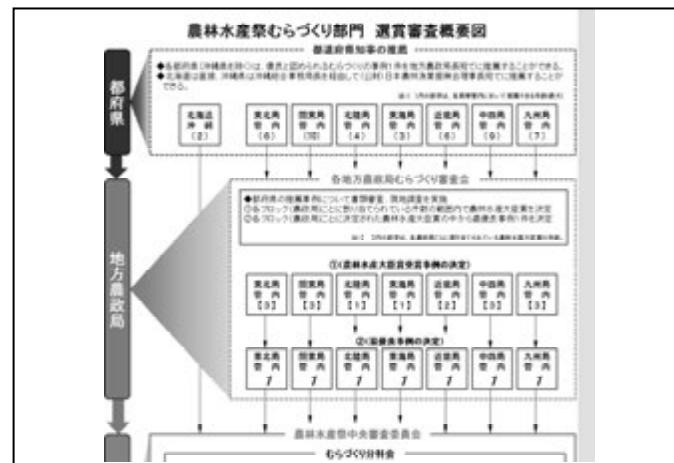
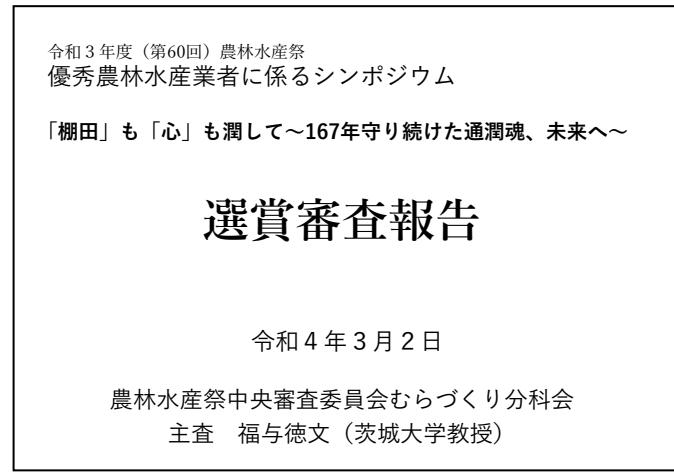
農林水産省中央審査委員会むらづくり分科会の主査を務めています茨城大学の福与です。私からは、どのような手順や基準で天皇杯をはじめとした3賞が選ばれ、天皇杯を受賞した白糸第一自治振興会が、どのようなポイントで評価されたのかをお話します。

白糸第一自治振興会の天皇杯受賞
テーマですが、「「棚田」も「心」
も潤して～167年守り続けた通潤
魂、未来へ～」です。

この天皇杯授与の決定がどのように手順でなされているのかをまずお話しします。むらづくり部門の賞の選定方法ですが、まず都道府県から

1件ずつ地方農政局にむらづくり優良事例を推薦していただきます。次に各地方農政局のむらづくり審査会で、その中から一定数、農林水産大臣賞を選んでいただきます。今日、関係するところで言えば、九州農政局管内からは7事例が各県から推薦され、3つの事例が農林水産大臣賞

に選定されました。その中から、つまり農林水産大臣賞受賞事例の中から各農政局で一つずつ最優良事例を選んでいただき、その中から天皇杯をはじめとした3賞が選ばれます。大雑把に言えばそういう流れなのですが、農政局がない北海道と沖縄については直接事例を出していただき、農林水産祭の中央審査委員会のむらづくり分科会でまず農林水産大臣賞にふさわしいかどうかを審査させていただき、その上で3賞候補として審議させてもらうという手順になっています。したがって、むらづくり分科会には7つの農政局から7つ



の事例と、北海道、沖縄から 1 つの事例、合計 8 事例が挙がってきて、その中から 3 賞を選定していくことになります。

次に分科会において、8 事例の中から 3 賞候補となる 3 つの事例をまず選定させていただきます。

そして、この 3 つの事例を通常であれば現地調査をさせていただいて、その結果を経て、第 2 回分科会において天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会长賞を

選ばせていただきます。令和 3 年度では、第 1 回分科会（8 月 3 日）においてに全国から出てきた 8 事例から 3 事例に絞り込み、現地調査、今回、コロナの関係で残念ながら現地に伺うことができなかったのですが、各委員の質問に動画で回答を寄せていただくという手法で現地調査をさせていただきました。その結果を踏まえて、第 2 回分科会（9 月 13 日）に 3 事例の中から、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会长賞を選ばせていただきました。

この選賞、8 事例から 3 事例に絞り、それから 3 賞を決めていくための基準が 5 つあります。①むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況、②むらづくりの合意形成の状況、③むらづくりの推進体制の整備・運営の状況、④むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況、

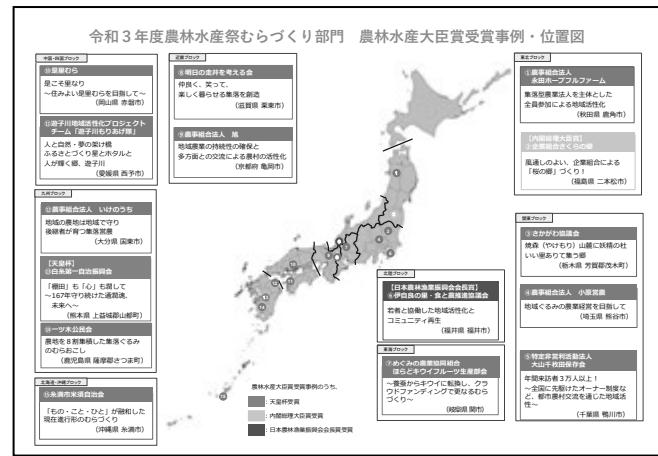
域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況、⑤むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況、の 5 つです。後のパネルディスカッションの流れも、これらを柱としていろいろとお聞きすることになるかと思います。またこのシンポジウムに、全国から参加されている自治体担当者の方も、こういった 5 つの審査基準で評価されるのだということをご理解いただければと思います。



選賞審査基準

- ・むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
- ・むらづくりの合意形成の状況
- ・むらづくりの推進体制の整備・運営の状況
- ・むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況
- ・むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況

さて、令和3年度農林水産祭むらづくり部門の3賞受賞地区をざっと紹介しておきます。天皇杯受賞が白糸第一自治振興会になります。それから、内閣総理大臣賞を受賞されたのは福島県二本松市の企業組合「桜の郷」です。この企業組合「桜の郷」は、そもそも農家の女性有志6名から開設した直売所



が元になっているのですが、出資の度合ではなくて、1人1票の民主的で非常に風通しの良い組織に育てていき、そういったことが道の駅「桜の郷」に発展して、いわゆる六次産業化、生産加工、販売、体験交流等々に取り組まれている事例です。それから日本農林漁業振興会会长賞受賞地区は、福井県福井市の「伊自良の里・食と農推進協議会」です。この事例は、若い世代や大学など、地域外とうまく交流しながら、水資源、森林資源、空き家などを活用しながら持続的な地域づくりに取り組まれている事例です。

天皇杯受賞地区に関しては、後ほど詳しくご報告いただくことになりますので、私の方からは、評価ポイントを簡単に述べます。

天皇杯を受賞された白糸第一自治振興会を評価するポイントは幾つもあります。先ほどの5つの評価基準を思い出していただきたいのですが、まず、自主的な努力と創意工夫、推進体制の整備・運営、合意形成という観点からは、

関係9集落からなる「白糸第一自治振興会」を設立し、米の出荷協議会である「通潤橋水ものがたりの会」と一体となって活動している。それから平成22年に国の重要文化的景観に選定された後、地域住民間の意識の共有化がさらに強固になり、食や地域づくりに関する知見向上のための勉強会、特にこの勉強会が盛んにされている点が高く評価されました。ビジョン作成のワークショップを重ね、通潤用水に感謝し、美しい白糸台地の景観を守りたいという共通認識、こういった勉強会を重ねることによって共通認識を醸成して、住民意識と地域力を高めているところ

白糸第一自治振興会【評価ポイント①】

自主的な努力と創意工夫／推進体制の整備・運営／合意形成

平成18年から関係9集落からなる「白糸第一自治振興会」を設立し、米出荷協議会「通潤橋水ものがたりの会」と一体となって活動している。平成22年に国の重要文化的景観に選定された後は、地域住民間の意識の共有化がさらに強固になり、食や地域づくりに関する知見向上のための勉強会や地域ビジョン作成のワークショップを重ね、通潤用水に感謝し美しい白糸台地の景観を守りたいという共通認識が住民の意識と地域力を高めている。

通潤橋

用水保全活動

勉強会

ろが評価されたのが評価ポイントの1となります。

それから評価ポイントの2です
が、むらづくり分科会といつて
も、やはり地域の農林漁業にどれ
だけ寄与するのかが重要なので
す。地域の農林漁業の振興、担い
手の育成という観点からは、棚田
管理といつても、景観がいいから
管理しましょうというだけでは持

続性がないわけで、米の高付加価値化、栽培出荷基準をきっちりつくって、棚田米をブランド化していくことによって生産者の意欲向上につなげていったところが評価ポイントの2になります。

それから評価ポイントの3です
が、豊かで住みやすい農山漁村の
建設ということで、女性部を中心
となった環境に配慮した取り組み
とか、棚田サミットをきっかけと
した都市農村交流とか、それから
大きな挫折感を味わうことになっ
た地震、豪雨災害、こういった災

害も企業や都市住民のボランティアと連携しながら、これを跳ね返しているといったところが高く評価されました。

それから、これを一番に言うべき
だったことかもしれません、評価
ポイントの4ということで最後に挙
げさせていただくのが「通潤魂」に
なります。これがこの白糸第一自治
振興会の原動力で、自治振興会を内
側から支えているものになります
が、これまでの160年以上の歴史を

白糸第一自治振興会【評価ポイント②】

地域農林漁業の振興／担い手の育成

棚田管理と収益向上を目的として米の高付加価値化（特別栽培米）を取り組んでいる。振興会では「通潤橋水ものがたりの会」を設立し、厳しい栽培・出荷基準を設け、卸売業者や百貨店から高い評価を得ている。また、ふるさと納税の返礼品に認定されるなど、棚田米のブランド化と販路開拓の取り組みは地域生産者の収益増加につながり、生産者の生産意欲向上に貢献し、地域の農業振興に寄与している。



特別栽培米「通潤橋水ものがたり」

白糸第一自治振興会【評価ポイント③】

豊かで住みやすい農山漁村の建設

女性部が、廃油を使った石鹼つくりなど環境に配慮した取り組みを行っている。また平成24年には、「棚田サミット」の開催を契機に都市農村交流活動を加速し、平成25年度からは「棚田ウォークと収穫感謝祭」を毎年開催して青年部がガイド役を担っている。さらに熊本地震と豪雨災害で大きな挫折感を味わうが、企業のCSR活動との連携にいち早く取り組み、多くの都市住民がボランティアに参加して交流活動を継続させている。



白糸第一自治振興会【評価ポイント④】

自主的な努力と創意工夫

167年の歴史

通潤魂

未来へ

豊かな心、勤労の喜び、創造の喜び、
不屈の意思を表す誇り高き伝統の継承



通潤魂の石碑

経て、これをまた未来につなげていくことが高く評価されて、白糸第一自治振興会の標題も最初にお示しましたように、「「棚田」も「心」も潤して～167年守り続けた通潤魂、未来へ～」ということになっています。詳しくはこれから発表をお聞きいただければと思います。

私からは以上です。

○司会 福与先生、ありがとうございました。続きまして、業績発表を、天皇杯受賞の白糸第一自治振興会の顧問、草野昭治様と下田美鈴様にお願いいたします。

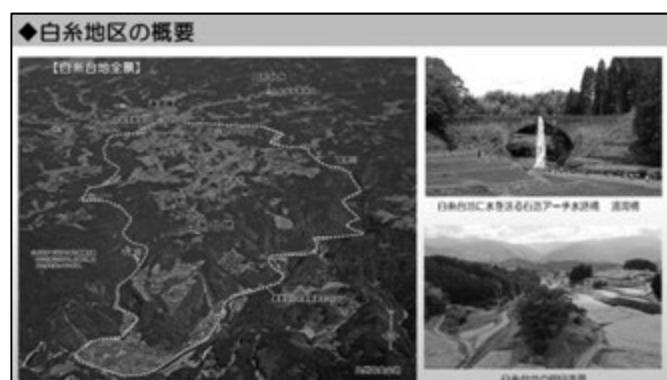
【業績発表】白糸第一自治振興会顧問 草野 昭治

皆さん、こんにちは。私は白糸第一自治振興会の前会長の草野といいます。今回の天皇杯の受賞は九州農政局を初め、熊本県山都町役場の指導のもと、また地域住民の協力による受賞できたものと改めて感謝申し上げます。

私たちの地域には通潤橋、通潤用水という宝があります。167年続けてきました。これからもみんなで守り続けていきます。これは通潤橋の眼下でお田植祭の様子です。

山都町の紹介ですが、山都町は熊本市の東部、九州のほぼ中央に位置し、「九州のへそ」の町としても知られています。標高約200から1,700メートルの準高冷地を活かしたトマト、キャベツ、ピーマン等の夏秋野菜の産地でもあります。また、日本一の有機農業の町であり、近年移住者が増えています。

白糸台地は標高450mから500mのところにあります。白糸地区の概要になります。左の白の点線の中が白糸台地になりますが、左の白の点線が千瀧



川、また右上が笛原川、右下が緑川という四方を川に囲まれた台地になります。昔から水に乏しく、通潤橋のおかげで100ヘクタールの水田が開墾されています。青の線が通潤用水になります。右上は白糸台地に水を送る通潤橋の放水の様子です。右下が白糸台地の棚田景観ですが、このように法面が高く、草刈りが大変です。

白糸地区の概要ですが、総世帯数174戸とありますが、地区内に町営住宅等がありまして、振興会の会員は130戸ほどになります。兼業農家は22戸、専業農家が60戸余りと結構専業が多い集落です。農家1戸当たりの

◆白糸地区の概要	
項目	内容
総世帯数	174戸
農家数	80戸
農家率	46%
専業農家	22戸
第1種兼業農家	10戸
第2種兼業農家	48戸
農家一戸あたりの耕地面積	1.7ha

山都町
白糸地区
特産品
巻柿

白糸地区の茶園 ほとんどの農家が米づくりをしている

平均が1.7ヘクタールとありますが、減反を差し引いたら平均1ヘクタール余りになります。右の白糸地区の特産は、右上が巻柿になります。干し柿を十数枚開いて重ねて、ラグビーボール状にしたもので、縄で巻いた特産品です。保存食にもなります。ほとんどが白糸地区でつくられています。また、白糸のお茶はおいしいお茶が生産されています。また、ほとんどの農家が米づくりを行なっています。

むらづくり活動の動機といいますか、住民の手による棚田、通潤用水の維持管理活動は昔から行なっており、平成18年に白糸第一自治振興会を立ち上げたのですが、前身としましては、平成17

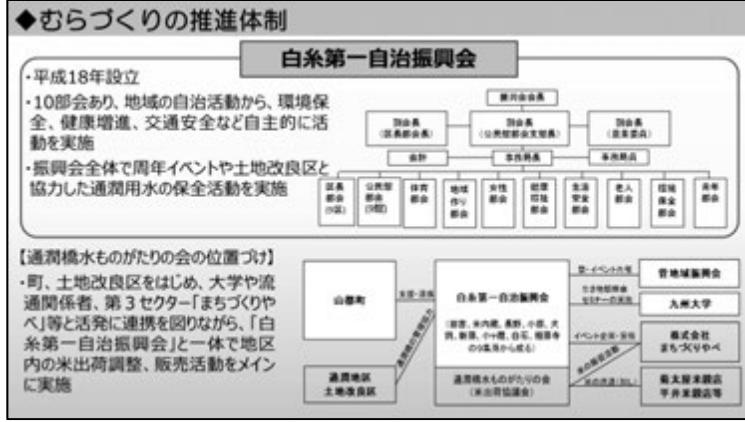
◆むらづくり活動の動機・背景

- 自治組織設立以前からの住民の手による棚田・通潤用水の維持管理活動
- 平成18年に白糸第一自治振興会を立ち上げ
- 平成20年に「通潤用水と白糸台地棚田景観」が国の重要文化的景観に選定 ※棚田としては初の事例
- 平成22年に白糸台地の全域が重要文化的景観に選定
- 「通潤用水と棚田を活かした地域づくり」をスローガンに掲げ、地域の再発見と現状の把握を目的としたワークショップの実施、白糸の歴史や自然環境、食に関するセミナーの開催

住民の自発的な景観維持や意識啓発のための学習活動等が活発化

年の山都町の合併で町の指導のもと、自治振興会を立ち上げております。平成20年に「通潤用水と白糸台地棚田景観」が国の重要文化的景観に選定され、棚田としては初の事例がありました。平成22年に白糸台地全域が重要文化的景観に選定されました。この文化的景観選定を契機に「通潤用水と棚田を活かした地域づくり」をスローガンに掲げ、地域の再発見と現状の把握を目的としたワークショップの実施、また白糸の歴史や自然環境、食に関するセミナー等を開催しました。セミナーは5か年余りで十数回行なっています。このセミナーを実施したことにより住民の実発的な景観維持や意識啓発のための学習活動等が活発化できたと思っております。

推進体制で、白糸第一自治振興会の組織図になります。これは18年設立とおりですが、その前から白糸台地の振興会はこのような体制でやってきております。10の部会があります。



体育部会、女性部会、健康福祉、老人部会、環境保全、青年部会等、10の部会となっております。振興会全体で周年イベントや土地改良区と協力した通潤用水の保全活動も実施しております。周年イベントは夏祭りと秋の収穫感謝祭が主になります。住民が楽しいと思うことが一番だと思ってやっています。下に「通潤橋水ものがたりの会の位置づけ」となっておりますが、町、土地改良区を始め、大学や流通関係者、第3セクター「まちづくりやべ」等と活発に連携を図りながら、白糸第一自治振興会と一体で地区内の米の出荷調整、販売活動をメインに実施しております。これについてはまた後で説明します。

これは農業生産面における特徴で、平成25年に総務省の過疎地域等再生支援事業に取り組んでおります。900万円の事業費を活用して、何に使うかという話し合いを多く重ねまして、この特別栽培米、右上になりますが、これは農薬を減らすための種子の温湯消毒器です。これは2台購入しております。また、私たちの地域はもともとお米がおいしいと言われておりましたが、確かにおいしいのか自分たちで測ろうと食味計を導入しております。下は通潤橋ができることにより開かれた白糸台地の農地の風景になります。

「通潤橋 水ものがたりの会」を26年に設立しております。また、「通潤橋 水ものが



たり」の商標登録も行ないました。また、女性の意見を反映した袋のデザイン等になっております。左の「美しい風景と阿蘇山麓の水が育てた米」ということで、これは大阪方面に販売している米で、右が主に、後で出ますが、ふるさと納税の返礼品になります。平成27年にふるさと納税の返礼品に認定されました。また、大阪の卸売業者を介して大阪のデパート数店舗で販売しております。また東京の熊本郷土料理店を初め、県外の飲食店でも販売しております。協議会に出荷されたお米は1俵当たり18,000円で精算しております。

通潤用水の保全活動ですが、上井出、下井出と言いますが、通潤用水の保全は住民総出で行なっています。数年前から地元の矢部高校生も参加してくれて、高齢化の中、本当に助かっています。右下の真ん中の写真が矢部高校生に棚田プロジェクトリーダーの下田さんから安全作業の注意をしているところです。今後もボランティアの力を借りながら、住民総出で守っていきたいと考えております。

③ 167年続く通潤用水の保全活動



【業績発表】白糸第一自治振興会女性部顧問 下田 美鈴

ここから下田が発表させていただきます。

最初に女性部長になったときに、平成22年重要文化的景観の記念祝賀会をやるので女性部長になってくれないかということで、何が何だかわからないままなったのですが、女性部の役員が集まると、必ず愚痴ばかりでした。何でこがんところに嫁に来たらうかとか、何でこがんことをせんとならんとだろうかとか、これは全国の中山間地の人たちが言っている言葉ではないかと思っています。

それで、私は最初にまず地域を好きになること、その地域を誇りに思う人が増えないと、地域づくりはできないと思いました、ワークショップを町の教育委員会、農林振興課の人たちと協力して行い、いろんなことをやりました。9集落のどこが自分にとって好きな場所か。これは50年後も残したい場所ということで、写真を撮り合いつこして、みんなで自慢大会をやりました。そして、その発表を聞いた後に、これは行政で修理をしてほし

いとか、こういうところはもっときれいにしようとか、それで花植えを始めたり、まず女性部で町の議会傍聴を始めました。それと、あと、棚田サミットでみんな県内外から来られるので、自分たちの歴史を知らないと、いろんな人に聞かれたときに説明ができないので、歴史の勉強会をやったことで、非常に盛り上がつてきました。それは歴史を知ると、本当にいいところだなということ、最初に愚痴を言っていた人が「景色のよかところね」みたい

◆生活・環境整備面における特徴

①景観維持のための住民意識向上と学びの活動



な、すごくいい声が聞こえてくるようになりました。それと、あと、棚田が重要文化的景観に選ばれたということで記念祝賀会を開催し、2,000本灯籠で、棚田に竹灯を入れて、右上ですが、地元住民で竹の灯籠をつくって、棚田のみずあかりを行いました。これは熊本県のポスターにも使われたのではないかと思うくらい、本当にきれいな景色でした。あと、記念祝賀会の前の夜に、女性部門のお年寄りも子供も300人ほど集まって、私がつくった大型紙芝居で、通潤橋ができた歴史の紙芝居をお芝居的にやりました。そうしたら、本当におばあちゃんたちが、お嫁には来たものの、そういうことを知らない人たちが涙を流して、つくられた方、先祖の苦労とかに涙ぐむ人もいたくらい、祝賀会の前の晩の出来事でした。下の左のほうは役場の人を交えてワークショップをやっているところです。

そのすぐ横は、「生き物観察会」で、何で田んぼにオタマジャクシが必要なのかとか、アマガエルはどんな役割をするのかとか、そういう知識を持った専門的な大学の先生に来てもらって、講演会をやっているところです。この講

①景観維持のための住民意識向上と学びの活動



演会も草野会長が自治振興会の会長のときに9つの集落で、1集落から必ず10名以上出席するようにというような、ちょっと圧力的な言い方なのですが、だから、地域の人たちが必ず100名以上が講演会を聞いてもらって、家庭菜園でできる野菜が食べられるってどんなに幸せか、こんなおいしい水が飲めるってどんなに幸せかというような、ここに住むこ

とを誇りに思う人を増やしていく講演会をずっと続けていました。これは棚田の「生き物観察会」です。地元の子供たちですが、都会の子供たちも一緒に参加して、田んぼに生きる生き物観察会をずっと続けています。希少動物のメッカで、福岡では3日間探しても、ここに来ると3分で見つかるみたいに、そのくらいいっぱいの昆虫とか、殿様カエルとか、タガメとか、そういうものはすぐに見つかるような地域です。

これは全国棚田サミットを地元で開催しました。地元の体育館で300食ぐらいのお弁当を作ったり、地元の人たちで、右下にあるように、案山子を各集落から2体以上作っていらっしゃいませみたいな、おもてなしの心

がどういうものかというのを、全国棚田サミットで学んだような気がしています。左上は円形分水と言って、通潤橋に来る最初のところにある民主主義を形にしたようなものです。

これは収穫祭です。収穫祭のときには、ものすごい人が集まって、地元の棚田とか、お茶畠とか、そういうところを歩きながら、都会の人も参加していたのですが、何と言っても一番人

気は真ん中の地域の人たちのつくる料理で、これがものすごく人気で、毎年参加者が増えています。左下はお年寄りの活躍のしめ飾りづくりの講習会、これも結構人気です。子供たちから、お年寄りまで、みんなが楽しめるイベントにしようということでやっています。歩くときに、一番右下にあるように、若い人たちが事前に歴史の勉強会をして、ここでは先導者も一番後ろから案内する案内役で、歴史の勉強会をやっているので、いろいろなことを聞かれても答えられる。そういうことで、若者たちがこの地域を好きになっていくというのにつながって、都会から来た人が「いいところですね」、「本当にいいところですね」と言ってくださることで、地域の人たちがいいところなのだというふうに思える地域になっていっています。

②棚田サミットの地元開催を契機に都市と農村の交流が加速化



H25年から継続開催している収穫感謝祭と棚田ウォークには、毎年、町内外から100名以上が参加

これは「通潤橋 水が渡る橋」というのを2013年につくった絵本です。これは各小学校、中学校、保育園にも配布されました。棚田サミットのときの商品で、全国から来られた方にもお土産に使っていただきました。

た。2017年に道徳の教科書にも採用された絵本です。

こうやって10年ほどがんばってきたときにやってきたのが熊本地震です。本当にどうしようと思うくらい何百カ所も崩れてしまって、これが引き金で農業をやめる人、その後に空き家がどんどん増えていきました。こ



③地震後の棚田復興プロジェクト



れはどうしようと思って、新潟の山古志村とか、福島の飯館村とか、私は視察に行って、「熊本地震はお金と時間があれば復興できるな」と思って帰って来て、熊大の先生たちに協力してもらって、ボランティアを入れた復興活動が始まりました。最初、復興ボランティアさんを入れるときに地域の人たちに説明したら、「ボランティアなのか、ためになるか」、「ボランティアなんか入れても邪魔になるだけだからやめろ」というような声も二、三聞こえていましたが、実際に一度に50人近くの人が来て、石ころ拾いとか、いろいろやってくださったときに、本当に地域の人たちが心から感謝して、今度、3月13日もありますが、いまでもずっと続けてボランティアさんが来てくださるようになりました。

昨年、山都町は「SDGs未来都市」に選ばれて、有機農業を核とした持続可能な地域としてやっています。結構、白糸地域もですが、町内にも有機農業をやりたいということで、この5年間に50軒、130人ぐらいに



引っ越ししてもらっています。

それと、山都町東京事務所を地震後につくってくださったおかげで、企業CSR活動の一環で、サントリーさんが棚田復興プロジェクトに参加されたり、あと、一昨年から山に木を植えたりすること始めました。

た。昨年はフランスに本社があるロクシタンの社長もフランスから来られて、今年も10年間は山都町を応援したいということで、コロナのまん延防止が明けたらいいのですが、3月26日、27日に一応100名の参加者で木を植える。伐採したままの放置林が結構ありますので、そういうところに自分の木を植えに、従業員とか、ロクシタンのファンの人が来られるようになっています。あと、ジープという会社の人も参加されるようになっています。10年間は管理したり、ここに来てお土産を買ったり、泊まったり、ふるさと納税をしてもらったり、それだけではなくて、ここのお米、農産物、これが最終的な棚田を支えてもらっている取り組みにつながると思って、これを10年間は最低続けてみようと思って、私の木を植える活動を続けております。

地域の「水ものがたり」のお米のときにも女性部でこのデザインを考えたり、おいしいお米をつくるために水を汚さないという取り組みで、石鹼づくりを10年以上続けています。何しろ167年間続けてきたことがこれから先続けていくのか、天皇杯をもらったから、すばらしいことをいっぱいやっているのだろうと思われるかもしれません、本当にまだ半ばで、今後、いっぱい課題が残っております。それは言わなくともあれですが、一昨年の農業センサス

で、これだけ農業者が減っていくように、うちの地域も高齢化と後継者不足というの

⑤企業のCSR活動との連携で、新たな取り組みの始動



◆今後の展望

- ①農業を生業として持続可能な地域づくり
 - ・通商機みずからがたりの販路拡大、取扱量を増やす
 - ・山都町のSDGsモデル事業と連動した取り組み
- ②167年受け継いできた通潤魂を次の世代の人たちに伝えていく取り組み
 - ・上井出、下井出の維持管理
 - ・棚田景観の保全
 - ・収穫祭・ふれあい祭り・新茶まつり
 - ・若い世代の意見を取り入れた地域活動
- ③白糸のファンになっていたいたい人との交流を深め、選ばれる地域づくり
 - ・しめ縄づくり等の伝承会
 - ・フットバスコースづくり
 - ・森林整備、植樹活動



これからも地域のさらなる活性化を目標に頑張ります！

れなくて、これをどうやって今から維持管理していくかが課題になっています。

以上です。

○司会 ありがとうございました。草野様、下田様、大変丁寧な説明、ありがとうございました。

○下田 すみません。3分間の動画があるのですが、これを見てもらって終わりにしたいと思います。

○司会 では、どうぞ流してください。

[動画再生]

○下田 以上です。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。美しい動画でございました。

それでは、これから10分間ほどの休憩を取ります。14時30分に再開にしたいと思います。ここまで2件のご報告にご質問などあろうかと思いますが、ご質問のある方はオンラインのチャットに記入いただくようにお願いいたします。パネルディスカッションの中で整理してお答えいただくようにいたします。それでは、再開は14時30分でございます。それまでにお戻りください。

(休憩)

○司会 それでは、再開いたします。これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして福与先生にお願いをいたします。福与先生、よろしくお願ひいたします。

【パネルディスカッション】コーディネーター農林水産祭中央審査委員会

むらづくり分科会主査 福与 徳文

○福与（コーディネーター） 茨城大学農学部の福与です。パネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず、パネルディスカッションに入る前に、パネリストの皆さんを紹介させていただきます。パネリストには、先ほど業績発表いただきました白糸第一自治振興会の草野顧問、下田女性部顧問の2人に入っていただきますし、冒頭に挨拶いただきました山都町の梅田町長にも入っていただきます。それから、農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科

会の委員であるNHKエグゼクティブアナウンサーの畠山さんと、熊本大学文学部の山下教授に入っていただきます。まず畠山さん、簡単に自己紹介をお願いします。

○畠山（コメンテーター） 紹介に預かりましたNHKの畠山と申します。アナウンサーと言うと、人が書いた原稿をそのまま読んでいるのが仕事かと思われる方も多いかもしれません、私の場合は現地に入って、そこの方々の話を聞いて、自分で取材をして放送するというところに努めてきました。最初の出だしは北海道の帯広というところで、大農業地帯から取材が始まっておりまして、当時は1村1品運動がかなり盛んに北海道でも行なわれていました。その体験と知識をもとに今回もむらづくりの選考をさせていただきましたので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。次に熊本大学文学部の山下先生、自己紹介をよろしくお願ひいたします。

○山下（コメンテーター） 熊本大学文学部で民俗学を教えております山下と申します。よろしくお願ひします。専門は民俗学であるはずなのですが、農業工学でもあります。たまたま、九州農政局のむらづくり審査会で務めさせていただいている関係で呼んでいただいたのだと思います。余り山都町さんとはなじみがないのですが、何とぞよろしくお願ひします。

○福与（コーディネーター） どうぞよろしくお願ひいたします。私と山下先生は、農研機構農工研究所で同僚だったことがあります。山下先生は九州農政局の審査委員長を務めさせていただいているとともに、農業工学や文化資源に関して造詣が深いので、是非ということでお願いした次第です。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきたいと思います。
まず振興会のお二人にお聞きします。天皇杯を受賞されましたが、コロナ禍で祝宴というわけにはいかなかつたと思いますが、地元の反応とか、どのような変化がありましたか。

○草野（業績発表者） いま言われましたように、コロナ禍で、地元の祝賀会等は開催しておりません。役場主催での祝賀会には、関係者が30人ぐらい、そして地元から20人ぐらいで盛大な祝賀会ができましたが、地元で祝賀会をやりたいということで、役員会もしましたが、やはりコロナ禍ということで、また増えてきたということでやめております。また、特別な変化はありませんが、ほかの振興会の会長さんや、知り合いからは「よかつたね」という電話等がありました。そういうところです。また、各受賞の経緯を、新聞には

出ておりましたが、みんながわかるように、経緯を綴って各家庭に配布しております。以上です。

○福与（コーディネーター） 下田さん、何かありますか。

○下田（業績発表者） その後、せっかくだからということで、記念誌をつくろうということで、収穫祭とかでつくっていた料理、メニューの献立とかも含めて、それから今までやってきたこととか、これから課題とかを1冊の冊子にまとめようと。これを視察に来られる方たちにも配布できるし、それを各戸に配ろうということで、3月18日にでき上がることになっています。それと、あと、それに対して、普通だったら「何でそんなのをつくるの」みたいな感じだったのが、やはり「天皇杯というのはすごいね」みたいな感じで、ほかの地域から言われるのですよ。「白糸はすごいね」と。それで、それを作るのに女性部も協力的になって作りましたので、多分いいものができると思っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございました。山都町のほかの地域からいろんな反響があったというお話ですが、普段、交流されている都市住民とか、他の県の方とか、そういったところからの反響はいかがでしょうか。

○草野（業績発表者） 栃木県からと、長崎から視察の申し込みがありましたが、一応、受け入れるつもりではおりましたが、コロナ禍ということで中止になっております。

○福与（コーディネーター） またコロナが落ち着いたら、普段、交流されている方々も様々な反響をこれから受けていくことかと思います。

それで最初に振興会のお二人に伺いたいのは、推進体制についてです。自治振興会という組織が鍵となっています。私もむらづくり部門の審査をしたり、全国のいろんな地域の事例を見たりしても、地域が活性化しているところでは、集落単独で何かやっているというよりは、幾つかの集落を組み合わせて、従来の集落より大きい、学校区とか、旧村とかというレベルで活動されていることが多いのです。この場合も、9集落が一つの自治振興会になって活動されていますが、9集落をまとめていく上で苦労された点、ちょっと意地悪い質問になるかもしれません、通常、たとえば水に厳しい地域だと、上流、下流でかなり仲が悪かったり、いがみ合いがあつたりするようなご苦労があったのかなかつたのか、通潤橋ができたために仲がよい集落だったのか、その辺も含めてお話しeidただければと思います。

○草野（業績発表者） 私たちのところは、いま言わされたように、水が本当に苦労していた地域で、天皇陛下の写真は家に飾っていないなくても、通潤橋をつくられた布田保之助の肖

像が全家庭、全公民館に飾ってあるように、水でまとまっている、通潤橋でまとまっている、通潤用水でみんながまとまっているという縛があると思います。

○下田（業績発表者） 私が最初に女性部長になったときに総会に出席して思ったのが、農村は本当に役員もほとんどが男性で、男性主体で話し合いが進められています。それで、女性部の予算は「えっ、これだけ」、「これでは何もできないじゃない。もう少し予算を上げてくださいよ」と言ったら、執行部で話し合いをしてくださって、ポンと3倍ぐらいに予算を上げてもらった。それが女性部の活動が活発になった理由ですね。そういうふうに、女性の声を入れというのが自治振興会の中でも大切なことだと思いました。

○福与（コーディネーター） いまお話を伺うと、通潤橋、通潤用水ができる、水を通して9つの集落がつながっていた。そのつながりがあったため、自治振興会ができたときも、元々のつながりが活かせたということなのですが、この自治振興会という仕組みは、山都町では白糸だけではなくて、全町的に作られたものなのでしょうか。

○梅田（コメンテーター） これにつきましては、山都町合併をしましてから、いま大体旧小学校区ぐらいの規模で28の自治振興区を作っております。ここに図がありますよう、各自治振興会でもこのような形の組織図はできておりますが、先程来ありますように、白糸第一自治振興会では、女性部の参画で活発化しているのが一番得意の部分で今のような形になっているのではないかなという思いでおります。

○福与（コーディネーター） 今のお話ですと、山都町が合併するときに、学校区レベルで集落の連合体である自治振興会の仕組みを作っていましたが、その中でも昔から通潤用水を介してつながりが強かった白糸第一自治振興会はほか地域と比べてもかなり強い縛を持っていて、活発に活動していたということになります。また、下田さんからお話をあったように、これまで自治振興会であろうが、集落であろうが、一定年齢以上の男性が仕切っていたものが、白糸では女性部を核として、女性が活発に、予算も増やして活動するようになったということですから、入れ物自体は町全体で整備されたのですが、これをうまく活かしたのが白糸だということです。

それからもう一つお聞きしたいのは、白糸では公民館が9館ありますが、全国では公民館はいろいろな使われ方をしています。9館あるということは、集落に1つずつ公民館があって、それを自治振興会が束ねていると見えますが、そういった理解でよろしいでしょうか。

○草野（業績発表者） 公民館は各集落に1つずつあります、各集落の公民館長が集ま

って主館長を決めて、役員会のときには公民館長と区長は全員出てもらうようにしております。

○福与（コーディネーター） 細かいことを聞いて恐縮なのですが、区長、つまり集落と、公民館と、自治振興会、こういうもので地域全体を治める中での役割分担はどのようなものでしょうか。

○草野（業績発表者） 区長会の部長が副会長、また公民館の主館長も副会長ということで、振興会のしたに公民館長と主館長と区長と農業委員を置いておりますので、役員会で決まったことを区長が各集落につなぐというふうにしております。

○福与（コーディネーター） 先ほど下田さんから、女性部会を起点にして、予算を上げてもらって、女性が自治振興会の中で活躍できるようにがんばったというお話をだったので、一方、若者は青年部会でがんばっているという感じなのですか。その辺をちょっとお聞かせいただきたいと思うのです。

○下田（業績発表者） 若い人たちには研修に行ってもらったりとか、視察の予算を取つて、最初は棚田サミットの前に視察に行ったりとかしていました。その後は地域のお年寄りから歴史の勉強会、いろんな話を聞くことを、若者が集まって、都会から来た人たちの道案内をするときに何でも知っていたほうがいいということで、フットパスコースにあるいろんなお地蔵さんとか、神社とか、いつ作られたかとか、そういうことを聞いたりして、若い人们はそういうことでまとまりができてきたような気がしています。

○福与（コーディネーター） そういういったイベントとかを通して、若者が地域の担い手として育成されていったということかと思います。

こういった自治振興会（推進体制）ができて、いよいよ農業遺産や棚田保全に話題を移しますが、一般に農業用水路であれば、春先、水を通す場合に泥さらいをやり、それから1年に2回か3回、草刈りを行うことが多くて、今どきは多面的機能支払交付金など、そういう国の交付金を使いながら運営していることが全国的には結構多いと思うのですが、通潤用水の維持管理の方法を具体的に教えていただければと思います。

○草野（業績発表者） 通潤用水は地元に通潤地区土地改良区というのがありますし、その土地改良区と振興会が話し合いながら、春先の土砂上げ、それと、6月、8月に草刈りをやっております。先ほどから出ていますように、ボランティアにも手伝ってもらっておりますし、各集落の黒板か何かに「〇月〇日の8時から土砂上げします」と書いておくだけで、全員集まります。

○福与（コーディネーター） 業績発表の中でも全員参加という話がありましたが、全国的には人が集まらなくて、出不足金というように、まるで罰金のようなものを取るなど、いろんなところでかつての仕組みが破綻してきており、多面的機能支払交付金などを使って新たな仕組みを構築しようとしているのですが、その辺の心配、通潤用水の場合は、危なかったとか、管理が行き届かなかつたとか、そういう時期はなかつたのでしょうか。大体今まで順調に進んでいると。

○草野（業績発表者） やはり大雨とか、地震とか、そういう災害で用水に土砂が入ったりとか、木が倒れ込んだりとか、そういうことは何遍か遭っております。それから、年々、高齢化になってきていますが、80代の方も出てもらったり、なかなか時間的に長くかかっていたのが、近ごろはボランティアさんのおかげで大分助かっているところもあります。

○福与（コーディネーター） 土地改良区と協力・連携してということなのですが、この通潤用水の土地改良区とは、どのようなものなのでしょうか。

○草野（業績発表者） 通潤土地改良区は水の管理が主です。うちの地区は基盤整備とかはほとんどされていません。土地改良区の会員も振興会の会員もほぼ一緒ですので、そういう中で土地改良区さんと振興会が協力しながらやっていくという感じになります。

○福与（コーディネーター） わかりました。これまで農業遺産、棚田保全についてお聞きしたところなのですが、ここからほかのパネラーにもコメントをいただきたいと思います。

まず畠山さん、取材された印象といいますか、通潤用水の保全活動についてコメントをいただければと思いますので、よろしくお願いします。

○畠山（コメンテーター） ここを取材しての結論は、いま世の中で、世界で一番大切なのがSDGsだと言われていますが、それを実行していくためのヒントが本当にここにあったということが結論になりました。最初何でそれに気づいたかというと、先ほど通潤用水でまとまっているとおっしゃいましたよね。でも、実は面倒くさいのですよ。用水路に穴が開いたら、普通はコンクリートを流し込んで直せば、すぐ直るし、通潤用水に頼るのではなくて、水道を引けば楽なのですよ。でも、いまだに守っていて、穴が開いたら、目塗りという作業があるのだそうですが、マツヤニが何割とか、水が何割、漆喰がどのくらいという基準があって、それでみんなで昔ながらに直すというのですね。なぜそれをいま続いているかというものの1つのヒントに、先ほど下田さんがおっしゃった、私が最初に

そこに入ったときにみんな愚痴ばかり言っていたという話がありましたよね。そのときに同じような話を私も聞いたのですが、下田さんがその地域でお茶碗を洗っていたら、おばあちゃんに怒られたというのですよ。「何で水をそんなに無駄に使うのだ。溜め水を使いなさい。匂いがついたら、それを消すためにミカンの皮を入れれば匂いは消えるのだ」と教わった。それを聞いて、下田さんは「ここは江戸時代か」と思ったと。でも、それをずっと続けていることが大切なこと。地域の宝をみんなが共有しているのですよね。なぜそういうことが起きるかというと、先ほど陛下の写真はないけれども、用水路をつくった人の写真はあるとおっしゃいましたが、ずっと伝承されている。地域の小学校の校歌でも布田保之助が歌われていたそうで、それが小さいころからずうっと刷り込まれてくるというか、教育されていって、地域の中の何が宝なのかをみんなが気づいている。

さらに今回、下田さんたちの役割として、そこに気づかせるための行動をもう一回上塗りをしたと。自慢大会ですよね。私たちの町の中で一番大切なものは何ですかということをみんなで問いかけることによって、もう一度皆さん的心の中に刷り込まれていった。それが多分、面倒くさいが、ずっと続けていくことが宝だと思わせているＳＤＧｓの原動力なのじやないか。それがこの地域に残っているという気がしました。

○福与（コーディネーター）　ありがとうございます。続いて、山下先生、よろしくお願ひします。

○山下（コメントーター）　山下でございます。天皇杯、おめでとうございます。最初に九州農政局のむらづくり審査会で審査した際、白糸第一振興会さんが出たときに、普段非常に謙虚な熊本県の委員の方が、非常に強く推されるのですね。ここまで言うならかなりいいところまでいくだろうと思っていたら、案の定、天皇杯という立派な成果を出されたのですが、いま改めて見ると、全国から出てくるもの、大山千枚田等、非常に有名事例がある中での天皇賞、これは大変なことだと思うのです。やはり通潤橋等、通潤用水というのは、熊本県にとって非常に特別なものであるような感じがします。農業農村工学分野を中心に、論文等を調べてみたのですが、2000年代に入って以降、管見の限り、10本以上の論文があるのですね。その執筆者を見ていると、北山清人さんに、林田創さん、多分熊本の方です。それも県庁の方だと思います。そして、島武男さん、こちらは福与先生もよくご存じだと思いますが、九州出身で九州農業試験場（現九州沖縄農業研究センター　熊本県合志市）に勤務していらっしゃる方ですね。そしてまた、熊本大学の古賀由美子さんたちです。熊本にゆかりのある方々に非常に愛されている。熊本城なみに愛されているのが

通潤橋なのじやないかなと思うのです。また、1983年時点で、これも県庁の方なのです
が、菊岡保人さんや、宮崎司郎さん、この方々、県の農政部の耕地第一課のご所属だった
らしいのですが、「吹上台眼鏡橋を築造した地域開発の先駆者 布田保之助」という論文
があるのですが、ここには布田保之助の独創的な企画、そして種山石工の名工であります
橋本勘五郎が関わっていますね。その橋本勘五郎の優れた技術、そして矢部に住むお百姓
さんたちの真剣な願い、そしてまた多大な藩の援助により完成した、とあります。まさ
に、オール熊本で作っている。そして白糸台地を潤した。白糸台地の人たちにとって大変
な利益、受益をもたらした一方で、やはり熊本県全体の誇りになっていると言えると思
います。

そしてまた、この論文の中で、この通潤橋、通潤用水が、さっき畠山先生がおっしゃつ
たとおり手がかかるのですが、その機能として、一つも現代土木工学の理論に適合しない
ものはないと表現されているのです。ですから、面倒くさいのだが、手作業で維持できる
農業土木の最新技術！。補修をしておけば、現代の農業土木技術と同等な効用を生み出
す、機能があるということですね。それは逆に言うと、現代人でも修繕できる。それを先
延ばしすると、未来の人でも維持できる。もし仮にウクライナ紛争がこのまま拡大してガ
ソリンがなくなっても、補修しながら使用しつづけることが可能な施設なのです。これは
非常に偉大なことで、やはり布田保之助と橋本勘五郎、そして白糸台地の人々の真摯で切
実な願いと努力の賜物なのであろうと思います。先ほど10本もの論文があると言いました
が、その内容がまたおもしろくて、実は技術的なものを書いたものは4本程度なのです。
そのほかはというと、通潤橋、通潤用水を通じた水管理、あるいは地域運営、それから耕
作放棄地管理による影響をもたらしている。経済外部効果みたいなことを中心に論じてい
ます。逆に手がかかるということが、皆ができるというところが、地域をより良くする効
果を生み出しているという論文ですね。ですから、農業農村工学的に見ても通潤橋、通潤
用水は未来にわたって非常に重要なもののだと改めて認識したところでございます。

とりあえず、以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございました。お二人から貴重なコメントをい
ただきました。次に町長さん。振興会の取り組みが山都町全体に与えている影響、あるいは
山都町全体の中でこの振興会の位置づけみたいなこと、それから振興会の取り組みにつ
いて町としてはどんなサポートしたのか、その辺をお話しいただければと思います。よろ
しくお願ひします。

○梅田（コメンテーター） 実は振興会組織をつくったのは、合併当時なので18年ぐらい前なのですが、その当時、区長制度、区長会等、いろんなものがあったわけですが、それでは行政の手がなかなか回らないという考えの中で、各地域の自治振興会を立ち上げていただきながら、行政の部分も一体となってしていただきたいという形の中で設立をされたという思いであります。そうした中で、28の振興会があると言いましたが、山都町は広い面積でございまして、3つの町村が合併した町で、自治振興区、会ごとにいろいろ取り組みがあったり、地域の事情も1つずつ特色ある自治振興会でございますので、なかなかすべてが白糸第一振興会のようにはいかないかなと思っております。いま自治振興会ごとに集落での組織を立ち上げたり、いろんな取り組みをしていただいているところであります。まだ全てではありませんが、そういう形の中で、先ほどありますように、草野会長も言われましたが、布田保之助翁が約167年前に通潤橋を架橋されました。その当時の「日本の棚田」という本にも詳しく書いてあります。私も今2人から聞きますが、各村ごとにずっと記録が残っている。そして先程来ありますように、通潤橋の手入れだったり、用水路の手入れをずっと白糸台地の方々はしてこられました。通潤橋の架橋後、また架橋前から、田んぼを開く、原野を田んぼに、畑を田んぼにと、部落総出でされたそうでございますが、そのとき、サボった人には罰があったというお話を聞きながら、そういう伝統が生きた中で、強制をしなくても集会にも集まっていたらしくし、用水路の手入れもみんなで集まってできてきているのではないかという思いであります。やはり、先ほどからあります布田保之助翁の思い全ての地域の方々が感じながら、いま白糸台地の中で生活をしているなという思いであります。

今回の受賞で、やはりほかの自治振興区の方々もまとめて、高齢化が進む、どこの自治振興区も一緒でございますが、そういう中で本当に希望を与えていただいたなという思いでありますので、そういう面で今後も続けていただけたらという思いであります。そしてまた、先程来ありますように、SDGs未来都市の選定も受けたところでございます。いま計画を立てているところでございますが、一番の手本が今回の白糸第一自治振興会ではないかなという思いでおりますので、それを含めながら今後取り組んでいきたいという思いであります。

○福与（コーディネーター） どうもありがとうございました。それでは、今度、農業生産面のことについて話を移していきます。先ほど畠山さん、山下さん、お二人の話にあったように、とにかく面倒くさいことだが、通潤橋という宝をみんなで守ってきたということなの

ですが、さりとて、それなりのお金にならないと、やはり続かないという面もあるかと思います。この点に関して、特別栽培米の活動を進めていったあたりをもう少し詳しくお話しitだけないでしょうか。それに山都町は町全体で有機農業に取り組んでおられると聞いております。こういった点との関連、また下田さんには、棚田特別栽培米と女性の活躍の点で何かトピックスがあればお話しitだけたいと思います。まず草野さんから、特別栽培米をつくった経緯を詳しくお話しitだければと思います。よろしくお願ひします。

○草野（業績発表者） 特別栽培米の動機については、もともと私たちのところは、農薬は県の慣行の半分ぐらいで、秋ウンカが発生すれば変わりますが、ほとんど農薬は使わない。除草剤も、ジャンボタニシを使ってみたり。先ほど言いました平成25年の総務省の過疎地域等再生支援事業、これが一番の契機で、種子消毒もやめよう、温湯消毒機を買おうとか、そういうことができて、それから特別栽培米に取り組むということで、26年に立ち上げて、大阪にP R活動に、県の大阪事務所を通じて、各卸しさんを回ったり、そういうことをしながらP R活動を行なって、いまの米を売るようなことを2、3年かけてやってきました。

有機農業については、下田さんから。

○下田（業績発表者） 実は、私は特栽米制度が切れた昭和62年、その翌々年から産直で消費者さんを募集して、そのとき、私は年間300万ぐらいの収入を得ている消費者の人たちを対象に幾らぐらいだったらお米が売れるのだろうと計算しました。そして、自分のところの農機具がいっぱいありますね。コンバイン、田植機、トラクター、そういうものの減価償却とかを計算して、1俵当たり幾らだったら後継者が残れる価格かというのを計算して、多分、そのときは10キロ7,500円に設定したと思います。西日本で一番高い米と言われていました。でも、後継者が残るためにはきれいごとでは済まされないわけですよ。

それで、平成元年から我が家は産直をしてまいりました。そういうので、自分が蓄えたノウハウを地域に落とし込んで、協力をどうにかして消費者をみつける。まず、おいしいお米の勉強会をやって、おいしいお米の勉強会に参加しなかった人にはお米は売らない。そういうのも作ったし、私も一緒に大阪に、足が棒になるぐらい歩いて回って、卸してもらうところ、地域のお米を販売するのに協力しました。なぜそこまでやるかというと、棚田というのは、上の田んぼに水が来ないと下の田んぼに来ないように、地域が一緒にならないと、自分のところだけ生き残るということはむずかしい場所です。それで、白糸台地の米をどうにかして売る仕組みを作りたいと思って、いまもかなり強力に協力をし

ております。

有機農業については、私が有機農業をやりたいと思ったのは1冊の本で、すゑつみさんの本で「農業は文化だ。文化とは命を守ることだ」、その2行で無農薬をやろうと。26歳のときに子供ができたすぐ後に有機農業を始めようと思いました。この町が有機農業をやっているということも知らないぐらいに自分は一生懸命有機農業を始めましたが、有機農業をしていて、暗い顔をしていたら広がらないと思って、いつもニコニコしてがんばろうというようにして、周りにもお茶農家がたくさんあるのですが、うちの集落は1人も農薬を使っている人はいない。お米も除草剤はほとんど使っていないという地域になってまいりました。私は、有機農業は一番の持続可能な農業だと思っていますので、町長もおっしゃっていますが、有機農業でまちづくり、これは本当に一番のSDGsだと思っています。

あと、女性の活躍についてというのは、やはり先ほど言いましたが、おいしいお米をつくるとき、まずはやはり水だと思います。水を汚さない。標高が高いところから下のほうに水は行くわけなので、水を汚さない地域というのをもっともつとうたい文句にしていて、合成洗剤を使わないような地域であるべきだというのは、女性が意識を高めないと、そういうことにはなっていかないと思っています。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。先ほど業績発表の際にも、天皇杯はもらったものの、今後、高齢化などの課題も大きいため、まだ途中だという話もありました。現在のところ、耕作放棄地は余りないように見えるのですが、耕作放棄地はそれなりに増えているのか。あと、担い手の確保状況とか、若い人など、町全体ではそれなりに入ってきていているということですが、白糸ではどうなのか。その辺の見通しのようなものをお話しいただければと思います。

○草野（業績発表者） 先ほど言いましたように棚田でありまして、基盤整備等はできていないということ。また、中山間直接支払とか、国の多面的事業、そういうものを使って、また集落が話し合いを行いながら、中山間のほうが5年間の契約ということで、みんなで話し合いながら、あそこの荒れているところをみんなで切ろうかとか、そういうことはできていますし、平成25年から収穫感謝祭と同時に、棚田ウォーキングをやっていまして、棚田をずっと熊本や福岡から来られた消費者さん。多いときは180人いました。少ないときでも80人ぐらい。いま100人限定にしていますが、そういう人たちを案内して回り

ますので、そういうところに遊休農地があったらおかしいといいますか、全然ないことはない。やはりみんな高齢化になってきてやめたりしている人もいますが、先ほど言いましたように、中山間直接支払というのが今は一番助かっています。それと、多面的のほうも毎月の役員会をしながら、協力活動では野焼きや草刈り等を考えておりますが、長寿命化のほうで各集落の農道の未舗装とか、まだ土水路もありますので、そういうのを計画しながらずっとやっておりますので、そういう面では助かっております。

それから、さっき青年部というのを言いましたが、これも10年ぐらいになりますか、私が会長ではなくて事務局長のとき、若者から「振興会の活動が何もわからない」ということを言われたのです。すぐ「そうしたら、おまえ、出て来い」ということで青年部を設立して、若者にも自分たちの思いを振興会の役員会で言ってほしいということでつないでおります。先ほどから言われるように高齢化は進んでおります。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。具体的な話でもう少しお聞きしたいのですが、白糸の棚田は法面が高く、草刈りなども大変だと思います。棚田の耕作というのは基本的には所有者が自分の農地を作付けて、法面の草刈りをやっているのですか。それとも、どこかで自治振興会、水ものがたりの会などが集落営農みたいな組織を立ち上げて、手が回らないところの草刈りをしてあげたり、耕作を請け負ったりとか、そんなことをやっているのでしょうか。現在の状況をお教えてください。

○草野（業績発表者） 集落営農については、今からの課題です。農業公社等で貸し借りですね。つくれない人の田を畜産農家がつくったり、そういうことはやっておりますが、できないところの草刈り等は集落等でやっていることは確かにあります。ですが、集落営農、先ほどから言いますように、これから考えて、今からどうにかしていこうという雰囲気がいま出ておりますので、それについては今からの課題と思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、農業生産面、特別栽培米が振興会の1つの評価ポイントだったわけですが、もう1つ、生活環境面に話題を移します。先ほども棚田の有機栽培のお米をつくるときにも水が大切だという点とか、棚田景観を維持することで、やはり外の人たちとの交流をしきりにやられている。特に震災後、企業との連携も強めているということで、環境保全活動、地域外の人との交流などについて、先ほど業績発表でお話しになれなかったことも含めて、何か補足していただければと思います。

○下田（業績発表者） 環境景観といったときに、この棚田景観は百姓仕事をやっている

人がいないと守れないと思っています。先ほどもそちらには聞こえてこなかったかもしれません、最近、野焼きの時期で、毎日のように山火事が発生しています。それはなぜかというと、夏に草切りをする人がいなくて、野焼きのときにお年寄りばかりで、水をかけて回れる人がいない、こういう現実で、景観を守るのがいつまで続けられるだろうかというのが実際の話です。それで、今度、うちの村も野焼きをやるのですが、ボランティアさんの募集をかけたら、20人ほど、拝見したいということで来てもらえることになっています。こういうことが本当に現実、中山間地、全国いろんなところに友達もいるのですが、うちだけではないなというのは思っています。そういうとき、企業のCSR活動といって、何かお手伝いしなければいけないみたいな、うまく利用する仕組みをすることによって、都会の人たちが泊まり掛けで来てくださって、そのときにちょっと話をして、山の役割、森の役割、そして棚田の役割、それが地下水になって、また川になって海をきれいにするのだ、そういう話をしていると、自分たちの食べ物をどこで、誰がどういうふうに作られているか、そういうことなど考えもしなかったみたいな人が非常に山都町ファンになっていかれるのですね。だから、都市の人を田舎に呼び込む。それこそ、ごちゃごちゃになって一緒に協力するということが、私は二、三十年前からこれは絶対大切な取り組みだと思っていたのですが、熊本地震のおかげなんて言つたらいけないのですが、あの後に本当にボランティアさんが増えてくださったので、今後も企業の人も、都市の住民の人も巻き込んで、山都町のファンを増やしていきたいと思っています。

女性の活躍については、やはりこういう声もですが、都会の人が来たときに「うちに泊まっていってよ」と、団子汁でもつくって、煮染めでもつくって食べさせることで、非常にファンになってくれるのですね。それで、やはり女性がいないと、農村、田舎のファンは増えないと思っております。

○福与（コーディネーター） 業績発表の中で、震災後、ボランティアが来たとき、地元の方の中には「ボランティアなんか役に立たないよ」という声があったと伺いました。例えば私も新潟県の中越地震の被災地に行ったときに、当初は「ボランティアお断り」という地域がありました。他所から来た泥棒も多いし、そもそも「役に立たない」と地元の皆さんのが思っているということで「ボランティアお断り」だったのですが、結局、ボランティアと地元をつなぐ仕組みをつくって、だんだんと打ち解けていったという話も聞きます。あと、有名なところでは、新潟県の十日町では、ボランティアが農地に入るのを地元では嫌がった。どうせ役に立たないからと。ところが、地元のメンバー、例えばこちらの

草野さんや下田さんの農地をボランティアにやってもらって、地域の人に見てもらって、「できるじゃないか」みたいなことで、だんだんと地域の中に溶け込んでいく仕組みをつくっていったのですが、先ほどちょっと気になるのは、「ボランティアなんか入れたつて」という、ちょっと都会の人に対する拒否反応みたいなもの、「急に来たってできるわけがない」というようなものはあっても不思議じゃないと思うのですが、その辺はどううまくやっていったのでしょうか。

○下田（業績発表者） 単純に「ボランティアさんが役に立つか、役に立たないか、一回でいいですからよろしくお願ひします」と頭を下げるしかなかったですね。土地改良区の役員会とかに行って。「うちの息子だって草刈りもしたことがないのに、ボランティアさんを入れても危ないだけじゃないか。あんなところにいけるはずがない」と頭から反対される人が何人かいらっしゃいました。でも、本当に地元の人が3すくいするときに、ボランティアさんは1すくいしかできない。でも、人数が集まれば、ものすごく力強くて、ボランティアさんが1日に50人来られたときに、30年ぶりにこんなに早く終わったといって、終わったときに「ボランティアって役に立つんだ」みたいなことを言われた。そのときの最後にはやってよかったと私は思いました。

○福与（コーディネーター） では、やはり下田さんが地域の人を説得して回ったということですね。一度、ボランティアを入れてみたらどうだと。

○下田（業績発表者） また、去年はボランティアさんが入って5年目だったので、各地域の方にアンケート調査、今後も続けてほしいかとか、ボランティアさんはどうだという6項目ぐらいのアンケートをやったら、99.8%の人が「ただ感謝、その一言です」みたいなアンケートが来たのです。「今後も続けてほしいか」というのには、「ぜひ。よかったら」というようになったので、また今年も続けようと思ってやっています。

○福与（コーディネーター） さて、ここまで農業生産面と生活環境面で追加的にお話をいただいたのですが、山下先生の方から、農村工学でも、民俗学的でも、何かコメントをいただければ幸いです。

○山下（コメントーター） ありがとうございます。民俗学では、畑作地域と水田地域では村の性格が違うとよく言われるんですね。これは白石昭臣先生という方がおっしゃられたのですが、畑作地域はハラ（原）の論理、水田地域はスジ（筋）の論理と言われます。地縁的な結びつきが強いのは畑作地域。血縁的な結びつきが強く、もしくは上下関係が強い。先ほど福与先生もおっしゃいましたが、水元をとめられたら困るという話もあります

が、そういうのが水田地域。そして、白糸台地というのは水田地域なのですが、記録によると、167年前までは、いま200ヘクタール弱の農地があると思うのですが、そのうち水田は8反ぐらいしかなかったのです。80アール。0.8ヘクタールですよ。完全な畑作地域だったのですね。畑作地域だと、作目も固定していないですね。いろんなものを作っていくのですよ。ですから、言葉が悪い言い方をすると、投機的な農業生産が発展するケースが多い。この辺で言うと、西原村がその典型だと思うのです。また、岡山県の畑作地域の加茂川町（現吉備中央町）円城というところで調査したのですが、そこの直売所で野菜を出している農家さんが1戸で50品目つくっているのですよね。直売所に通年出荷できるようになります。ですから、比較的新しいこと、その時代に求められていること、有機農業とか、そういったいろいろな高付加価値の農業に取り組むのはやはり畑作地域のほうが取り組みやすいのではないかと思っています。

そしてまた、もう一回言ってしまうのですが、やはり通潤橋は特別ですよ。1960年から有形重要文化財です。そして主要な水利施設として現役のままなのですよ。こんな施設はなかなかありません。それも手はかかるけれども、手で直せる。そして現在、新しくつくったものとほぼ同等の機能を有している。ですから、これが農林水産行政と文化財行政、普通、この二つは齟齬を起こします。水田は、ほ場整備して高機能化したほうが絶対にいいですよ。でも、通潤用水という古くからある今も最新の施設がある。その最新の水利施設に、農水系の事業もいろいろあります。具体的には、地域用水整備事業、歴史施設保全型等ですね。一方で、あるいは文化庁も大切に修理をする。有形重要文化財ですから。さらに、重要文化的景観。普通なら、文化財に指定や選択されたら、ほ場整備や施設の高機能化は難しくなりますね。しかしながら、通潤用水や白糸台地は、文化財行政と農林水産行政と、その双方から大変に愛されている。奇跡的ですよね、その関係性の中で、有機無農薬農産物等、高付加価値化を可能にした。ですから、非常に重要なことは、多方面の方々が通潤橋と通潤用水、そしてそれにより拓かれた棚田の価値、そこで栽培された農作物の価値を理解している。その価値を守るには手はかかるのだけれども、ペイできるような高付加価値化を可能にしている。非常に理想的な地域だと思います。文化庁と農林水産省と、総務省が仲良く共同して援助している地域。また、道の駅もありますから国交省も入っているわけですよね。それが喧嘩することなく、この地域のために有益に機能している。まさに奇跡的だと思いますね。一方で、住民の方々の努力も当然あります。それは畑作地域の人たちならではの新規性。畑作地域の人はわりと開かれているのですよ。ほうき

の先っぽの工業原料もつくっていましたから、よその資本も入れてくるわけですね。ですから、開かれています。その特性を最大限に活かして、今につながっているという感想を持っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。まさに次の活動の原動力につながるものかと思います。歴史をひもとけば、この地域は167年間通潤用水により水田だと思っていたら、実はその底流に畑作魂があって、それがこの地域の発展に寄与しているということでしょうか。

○山下（コメンテーター） そうです。日本人の観念はちょっとした事件で変わるのでよ。刀刈りで土農工商ができ、生類哀れみの令で日本人はやさしい民族になっていった。ですから、167年前に、この通潤橋、アーチ橋ですから支保工として木組みをつくるのですよね、それを外したときの様子が論文に書いてあるのですが、外したら、まずガシャーンと大音響が響いて、濛々と土煙が上がって、岩同士がきしみながら安定した。その土煙がパーンと晴れていったとき、堂々とした通潤橋が屹立していた、という完成当時の光景が書かれているのですが、あのときの一件が、やはりこの白糸台地の地域住民の特性といったもの、畑作民としてのものを維持しながら、きちんとやっていこうという気質をつくった一つの契機になったのではないかと想像されてなりません。

後のコメントでまた言いますが、その後のこといろいろ影響を与えてているのだと思います。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは活動の原動力で、表彰のテーマとなっている「通潤魂」に話題を移します。いま山下先生からお話をあったように、何か日本人というと、稲作民族で、保守的でおとなしい点が特徴だったのですが、白糸はもともと畑作的な精神を持っていて、そこに通潤橋ができる、稲作が導入されたので棚田なのだけれども、畑作的な魂、新規性を持っているということなのですが、そういう話をお聞きになった後、なかなか話しにくいかもしれませんが、通潤橋を核としたこの地域の活性化といいますか、今まで地域を運営してきた原動力について、草野さん、下田さんはどのようにお考えなのか、ご感想でもいいですから、お聞かせいただきたいと思います。

○草野（業績発表者） いま言われましたように、通潤橋をつくられた布田保之助翁は神様みたいな人で、白糸台地地区には神社もつくってありますし、私たちが小学校4、5年ぐらいまでは白糸第一小学校の校歌は布田保之助翁の歌でした。いまも各イベント、総会

や、何かの催し、また年2回、布田神社の例祭とかがありますが、そのときは必ず布田保之助翁の歌を歌つてから何でもやるのが地元地区のあれで、布田保之助に感謝するという気持ちが一番の原動力と思っておりますし、また自分が白糸に生まれ、農家に生まれ、棚田に生まれたから農業をしなければならないというのが昔のあれで、今はちょっと変わっていますが、小学校のころから歌っていますし、今も歌っている布田保之助翁の歌が一番の原動力で、通潤用水に感謝しながら農業ができるのが原動力だと思っております。

○福与（コーディネーター） 下田さん、いかがでしょう。

○下田（業績発表者） 私、畠山さんと山下教授の話を聞いて、日本に「手入れ」という言葉があるじゃないですか。日本の自然というのは木も剪定しないとぐちゃぐちゃになるし、森も間伐してあげないと、またごちゃごちゃになる。棚田も草刈りしたりする。その手入れ、本当にお金にも余りならないことを、コツコツと力仕事で、泥だらけになって、土砂を上げたりする。最近、コロナでもあるのですが、非常に劣化していく社会、劣化していく民主主義、劣化していく大元は、利他、やはり日本人の精神が一番劣化しているのではないかと。農業とか、漁業とか、林業とか、建設業の土砂などを上げる、そういう仕事をしようとする人がいない。手入れの一番の基本と根性と忍耐力、それと責任感。こういうものが日本人になくなって、さっき畠山さんの話を聞いて、これを発信できるところがこの地域じゃないかと。一言で言うと、こういうことをした布田保之助さんの精神が私たちは永遠とこれからも、また未来に対してつなげていく役割があるなと感じました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございました。今かなり重要なことを言われました。劣化する民主主義などは、いまの世の中そのものです。それと関わる点で言えば、「利他」という言葉を使われたのですが、そういった「利他」のようなものが地域で育っていくのも、放っておいても、自然に育まれるものではないと思うのですよ。受け継ぐということも含めて。その中で、審査委員会でも高く評価されていた点として、この地域の方々は非常に熱心にワークショップも含めて、勉強会に取り組んでいらっしゃる。それも先ほどの山下先生の話の続きで言えば、古いものを引き継ぎながらも新しいものとか、こういったものを学んでいこうと。勉強会の回数や、特に女性が積極的に学んでいる点が審査会でも高く評価されていたと思うのです。勉強会を、なぜ進めていったのかという点をもう少しお話しいただければと思います。

○下田（業績発表者） 私、大学を卒業して帰ってきたときに、うちの町に図書館がなかったのです。考える農民が増えないと豊かな町にならないと思っていましたので、図書館

をつくる活動を22歳から始めて、図書館を作りました。それで、読書会を始めました。読書会を始めていくうちに、月に2回、読書会を必ずずっと続けて、図書活動として続けてまいりました。そういうことで、いろんな図書館講演会をやっていましたので、そういう中で、新聞記者であったり、作者さんであったり、いろんな人と知り合うきっかけができました。そういう人を地域に呼び込もうと思って、せっかく仲良しになって、ほとんど「お金は要らないよ」みたいな感じで来てくださる方が多くて、地域に合うような人、この人はいいなと思うような人に来てもらって、図書活動で知り得た人たちに来てもらってやっていました。やはりたった1回では無理だから、何回も何回も繰り返すことで、自分でつくった食べ物が食べれるという豊かさ、そういうものをちゃんと認識してもらうためには、田舎にいるから野菜なんか買わないと思っていたのに、いまほうれん草なんか作つたって、「きれいに洗ったものをスーパーで売っているじゃない。裏で作るよりは、泥つきの汚いものを食べるよりは、スーパーで買ったほうが早いわよ」みたいな、そういう農家の奥さんたちも増えてきたのですよ。そういうのは本当に自分で漬け物も漬けなくて、黄色の沢庵とか、そういうのを使うのは、未来に本当に寂しくないのと思うことがあったから、食品添加物の話をしてくれる人とか、そういう人たちを繰り返し呼んで、自分で弁当を作れる子供を育てようとか、そういうことを続けてまいりました。一番根っこにあるのは図書活動から始まったことですかね。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。いま「考える農民」という言葉が出てきました。そういったことが戦後すぐの普及部門で唱えられていたと記憶していますが、それがここに息づいていることを確認させていただきました。

私の段取りが悪くて時間がだんだん迫ってきましたが、白糸第一自治振興会が山都町の数ある振興会の中でも一つ抜きんでた存在であるというところで、町長さんから見て、この白糸第一自治振興会の原動力をお話しいただければと思います。よろしくお願ひします。

○梅田（コメントーター） 今お2人の話を聞かれたと思っておりますが、草野前会長はずっとJAに長くおった中でいろんな取り組みをしてこられましたし、下田女性部長は、ずっと地元でいろんな活動をしながら、今回このような取り組みができたのも2人の指導力があったおかげかなという思いでおります。やはり何をするにもトップの方のリーダーシップが一番かなという思いでおります。いろんな自治振興会があると言いましたが、やはりやり方は一緒ではないと思っております。トップを頭に、トップの思いが通じるよう

な組織であれば、このような組織づくりができて、むらづくりができるのかなと感心をするところであります。先ほど山下先生からありました、ここに来る前も担当課長と農水省と文科省のせめぎ合いの中で、適当にあしらってしなければいけないと。補助事業が大変で、いま周辺整備、通潤橋の整備等々も手がけているところでありますが、いま山都町の行政の中では通潤橋が一番の宝と思いながらも、周りの整備なり、事業をするには非常な苦労があります。先ほど先生が言われたような形で、どっちかの主導になればいいと思っておりますが、それよりも、文科省も農水省も両天秤にかけながら事業をしていかなければいけないかなと。これをずっとずっと守っていくのは大事なことというよりも、われわれの仕事でありますので、そういうことを含めながら、いま先生の話を聞きながら、取り組みの姿勢ももう一回考え方を直さなければいけないなと思いを強くしたところであります。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。畠山さん、地域の原動力について取材等を行なわれたところでの印象をお話しいただければと思います。

○畠山（コメントーター） 今の話の続きで言うと、勉強の場をつくるのがすごく重要なとおっしゃいましたが、多分、この勉強の場をつくったことだけではなくて、その人たちの学びたい意欲はものすごく育っているのだなと思ったのですね。それを育てたのは何かというと、振興会の方々がいろんなおもしろい勉強の方法を教えたのもあるかもしれません、実は下田さんと話していて1つ気がついたのは、よそからの人たちの目という部分がものすごく自分たちの学ぶ意欲につながっているという気がしたのです。紹介のところで、町の農産物を売る会のときに、地域以外の人たちが来たら、おばあちゃんが漬けた漬け物が売れるとか、そういったものを都会の人たちが喜んで食べててくれる。それを見ておばあちゃんたちが活気づくというお話があったでしょう。あれこそがまさに地域の人たちの学びの場なのですよね。ボランティアの方々が地域に入って、確かに農業生産性は余り上がらないかもしれない。でも、そこに来たボランティアの人たちが「この景色はいいわ」、「2,000枚の棚田ってこんなに綺麗だね」と言ったら、やはりシカとか、イノシシが出ている棚田を、明日にでも整備してみようかと地元の人たちは思いますよね。それが地域の原動力になって、学びの原点だと思うのです。まさに時代が今、最初に申し上げた S D G s、梅田町長も S D G s でまちづくりをとおっしゃいましたが、そこに全世界の人たちが向かっている中で、山都町がやっている白糸の人たちの思いは通じると思う。その原点になったのがついこの前ありました、牛乳の消費拡大運動。コロナで牛乳が全く売れ

なくなりました。そのときにどうしたか。多くの消費者が私も、私もと言つて牛乳を買いました。今から三、四十年前、北海道は牛乳が余って、消費拡大運動をしたのです。そのときは生産者の視点でやりました。「買ってください」。でも、誰も買ってくれなかつた。でも、今は消費者が動き出している。それは命のあるものが出したものが捨てられてしまう。こんなことで農業は維持できないと言つたら、そうだ、私のことだと思って助けてくれた。そういう時代がいま来ている中で、白糸の方々がやっている地域にあるSDGs。SDGsって響きはいいのですが、そこに暮らしている人たちにとってみれば本当は不便でしかないですよ。でも、その不便さが宝になるという時代が来ているので、これはもっと原動力になるのではないかなという気がしています。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。さて、お約束している時間がもう間近になってしましました。お聞きになっている方々からの質問がチャットに上がっているでしょうか。

○事務局 上がっておりません。

○福与（コーディネーター） わかりました。時間もありませんので、特になければ、このまま最後の締めに入らせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、最後、お1人お1人ご発言をいただきたいのですが、地元の草野さん、下田さんには、白糸の課題と今後の展望、町長さんには町全体を含めた課題と展望、それから山下先生、畠山先生には、有識者からのアドバイスということ、かなりもうお話しを聞いておりますが、繰り返しになっても結構ですので、短めにそれぞれよろしくお願ひいたします。それでは、草野さんからよろしくお願ひします。

○草野（業績発表者） 今後の検討課題としましては、やはり高齢化が進む中、通潤用水、棚田をどうやって保全していくかの話し合い、また農地をどう守っていくかの話し合い、集落営農についての検討、またコロナ禍での消費者との交流、またフットパスを活用した交流のあり方等を今から検討していかなければと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。下田さん、よろしくお願ひします。

○下田（業績発表者） 私、木を植える活動を続けて、ここの町に足を運んで、自分の木はどうなったかなみたいな感じで見に来てくれる人を増やすことを考えています。また、私の家の畑は九州脊梁がものすごくきれいに見えるところなのですね。都会の人たちがそ

こに寝っころがって、夜は星を見てもいい、昼間、バーベキューしてもいい、何か悩んでいる人だったら、その景色をボーッと見てもいいという、ボーッとする場所をつくりました。それこそ通潤橋の同じ石で石畳をつくって、そこでボーッとしてもらったらいいなと思って。そういう交流を都会の人ともっと深めたりしたいと思います。でも、自分たちが努力しても、努力しても、農業センサスの結果が5年で、2015年から2020年に25%も減ったというこの事実を見たときに、まず最後はやはり国が日本に農業は大切だと思ってくれるようなシステムが一番だなと思っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。町長さん、よろしくお願ひします。

○梅田（コメンテーター） 今回の白糸第一自治振興会の受賞を機に我々もう少し真剣になって農業政策であり、地域づくりに取り組まなければいけないなと思っておりました。その矢先といいますか、去年、先ほどありますようにSDGsの未来都市の選定を受け、来年度からになりますが、新しい有機農業を核にしたSDGsの取り組みを、ここにおります農林振興課の担当であったり、SDGsの推進室をつくりながら今後進めていきたいという思いでおります。町民の方々には、先ほどいいましたように、いまの1人1人の生活がSDGsにほぼ近い生活を山都町の方々はしていただいていると思っておりますが、国を挙げてSDGsという形の中でいろんな予算措置をしたり、農業、林業におきましては、大々的にSDGsがすべて農業化というような取り組みをいま始めておりますが、なかなかあのような形にはいかないのではないかという思いでおります。地道に一つずつ積み重ねて、今までわれわれがやってきたことがSDGsの本当の取り組みの姿ではないかなと思っておりますので、町民の方々にも自信を持って、また白糸第一自治振興会の取り組みも多くの方々に理解をしていただきながら、28の自治振興区、町民の方々がおられますが、他山の石ではなくて、私たちもできるのだなという取り組みをわれわれ町を挙げて取り組んでまいりたいなという思いでおります。高齢化、高齢化と言っていても始まりません。山都町の中でも70歳、80歳の方がトラクターに乗り、農業の現役でがんばっていただいているので、そういうことも含めながら、元気なまちづくりを進めていきたいと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。それでは、山下先生、畠山先生から、今後の振興会のさらなる発展に向けたアドバイスをよろしくお願ひします。まず山下先生から。

○山下（コメンテーター） よろしくお願ひします。また布田保之助ですが、布田保之助の最大の功績は、僕は「通潤橋仕法書」を残したことだと思うのです。いま土地改良区に保存されていると思いますが、あれがあったからこそ、2009年の地域用水整備事業で通潤用水を大規模に修繕し高度化することができたわけですね。また、その地域用水整備事業では施工の過程をビデオに撮って記録として残して、報告書も作った。それは今後の修繕に活かすためですよね。そしてさらに平成25年にレーザー3D解析をしています。あの3年後に起こった熊本大地震。石垣が根本から崩れた。それを修繕できたのはその3Dレーザー計測があったからですね。そういったつなぐという努力をいろんな人がしてきて、去年7月放水ができた。これは167年前にガシャーンと支保工を取ったとき以来の歴史的大事件だったと思います。今後の山都町をよい方向にもたらしていくものだと思います。そして、その後、3月18日、今度、皆さんがこれまでの活動を書籍化するのですよね。これは新たな「通潤橋仕法書」になると思います。ですから、僕は思うのですが、布田保之助は個人として大変立派な人なのですが、皆さん自身が布田保之助なのですね。この地域、通潤用水を含めたこの地域を今後とも続けていかなければいけない。

やはり熊本県の人は非常にまじめな人が多いので、民族誌をつくるときに余り遊びがないのですよ。生き物調査の結果を見ていると、タカハヤもいますし、カワムツもいます。恐らく小さいころ、そういったものを轟川で採って遊んだりした経験があるかと思います。そういったことを中心に書いてくれると、これは後世に、大変喜ばれると思います。岩手県岩泉町の民俗誌（『岩泉地方史』）がまさにそうなのですが、読み上げるだけで年寄りが喜ぶのですよ。若い人も、へえー。こんなことがあったのだ、やってみようになるのです。ですから、そういった遊びを含めた、楽しみのある、ふざけた部分がちょっとある、失敗したとか、そんな話も入れて、住民自身が記述し続ける民俗誌みたいなものをつくっていただけだとすごいことだなと思います。

以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。通潤橋自身はハードなのですが、記録としてのソフトをきっちりと残していく、それこそが大事だということですね。それでは、次、畠山さんからアドバイスをよろしくお願ひいたします。

○畠山（コメンテーター） アドバイスなんてめっそうもないのですが、いまのSDGsの国の進め方は、簡単に言うと、都会に住む人たちの価値観で物を語っている感じがするのです。そこに暮らしている方々はさっき言ったように不便なのですよ。その人たちも

含めて、本当に住みやすい地域だねと言えることをどうつくっていくかはすごく課題になると思うのです。確かに都市に暮らしている人たちにとってみれば、その辺に山林があるのはすごくいい景色かもしれません。でも、山林は切ったほうが楽なのは当たり前。でも、切らないで、そこに残しておくことが、いかにそこの暮らしを営んでいく上で自分たちにもメリットがあるのかを、地域の人たちも考えられるような行政政策を取っていただきたいなというございました。

それともう1点。話はガラッと変わりますが、今回、取材をしてみて、あの通潤橋の棚田、2,000枚あるそうですが、そこでこれから僕がやってみたいことは、2,000枚の棚田の1個1個に番号をつけて、俺はこの棚田の米を食いたい、その要望に応えてほしい。しかも、1俵60キロではなくて、たとえば200グラム、300グラムという小分けで、いろいろ食べ比べてみたいのですよ。標高の高いところとか、水の上のほう、下流側の米とどう違うのかとか、このおっちゃんの米を食ってみたいと。小分けであれば、キロ当たり100円上げたって、ほとんど値上げしたと感じませんから、ぜひ試してみてください。お願ひします。

○福与（コーディネーター） アドバイス、ありがとうございました。最後、もうまとめようなことはございません。通潤橋、通潤用水というのは、先ほどから山下先生がおっしゃられているように極めて奇跡的なお宝です。だけど、厄介なというか、管理するのが面倒くさいお宝で、審査の過程でも「これは特別なのじゃないか」という議論もありました。しかし、このように重要文化的景観に選定されたこういった案件は全国いろいろなところであります。通潤橋ほど特別なものはそれほどないかもしれないですが、そういうものに指定されたものが、昔から引き継がれて、今度未来につなげていく。先ほどからSDGsという言葉が出ていますが、そういうことを具現化する1つのモデルとしてやはり天皇杯にふさわしい事例ということで、横展開されていけばよいと思います。まだまだ、地域の中では、こういうすばらしいけれども、面倒くさいお宝をこれからも大事にしていっていただくためにいろいろな課題がありますが、どんどんと発展していっていただければと思います。そういうことで、まとまりのない締めになってしましましたが、これにてパネルディスカッションを閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

では、小栗さんの方にお返しします。

○司会 パネラーの皆様、お疲れさまでございました。有意義な意見交換、特に熱い思いを皆さんに語っていただきまして、ありがとうございました。オンラインの参加の皆様方も、長時間にわたって視聴いただきましてありがとうございました。以上をもちまして、優秀農林業者に係るシンポジウムを終了いたします。

本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を当協会のホームページにアップいたします。今後の活動の参考にしていただければと思います。

また、本年6月ごろには農産部門、あるいは多角化部門のシンポジウムを開催することを予定しております。こちらもオンラインで視聴が可能にいたしますので、ご関心のある方は参加をよろしくお願いいたします。

なお、参加の皆様方、ズーム会議から退室されると、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答いただくよう、重ねてお願いいたします。

本日はまことにありがとうございました。

(閉会)

令和3年度（第60回）農林水産祭
（第29回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
（「棚田」も「心」も潤して～167年守り続けた通潤魂、
未来～～）

発 行 令和4年5月
編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会
〒107-0052
東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル7階

TEL (03) - 6441-0791 (代)
FAX (03) - 6441-0792
URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。